

鉄道史研究と『鉄道省文書』・補遺

青木 栄一

『歴史地理学』220号(2004年9月号)に掲載された拙稿「鉄道史研究と『鉄道省文書』」において筆者の体験を中心として『鉄道省文書』の特徴や所在・管理の変遷について述べたが、従来、この史料を取り上げた文献について見落としがあったので補足したい。

『鉄道省文書』については、「『鉄道省文書』所蔵箇所一覧」という極めて貴重、かつ基本的なリストが公表されている。このリストは、伊藤雅彦、星野真太郎、石野哲の共編になるもので、1999(平成11)年11月22日現在で作成され、宮脇俊三(編):『鉄道廃線跡を歩くⅦ』(JTB, Can Books, 2000, pp.210~234)に掲載されている。これは、開業私鉄、未成私鉄、専用鉄道に関して、国立公文書館と交通博物館に所蔵されている『鉄道省文書』の一覧表であり、国立公文書館の2568簿冊、交通博物館の494簿冊(うち国有化された私鉄分148簿冊)、合計3062簿冊を含んでいる。ただし、1998年に国立公文書館に追加移管さ

れた約600簿冊は含まれていないとされている。『鉄道省文書』に関する従来公表された最大のデータベース(索引)と考えてよく、プロの研究者ではない鉄道史研究者のレベルの高さと層の厚さを示す作業として注目される。

ここには『鉄道省文書』の概要が説明された後、都道府県順に鉄道コード番号(和久田康雄:『私鉄史ハンドブック』<電気車研究会, 1993>のなかで、和久田氏が開業私鉄に付した私的なコード番号。ただし専用鉄道や未開業に終わった私鉄についてはコード番号はない)、鉄道名、その読み方、文書に含まれる年度、国立公文書館または交通博物館の閲覧請求番号、の各項目が記載されている。

このリストは『鉄道省文書』の研究に当っては極めて重要な文献であるにもかかわらず、執筆時に筆者の不注意で紹介漏れとなってしまった。著者校正の後でこのことに気付いたので、ここに記して補遺としたい。